ネルヴァルとゲーテ

藤　田　友　尚

《Ⅲ》

ネルヴァルが読んだゲーテの作品のなかで，最近まで研究の対象からまったく漏れていた作品がある。『ノヴェレ』がそうである。1840年に *Lettres aux belles femmes de Paris et de la province* に無署名で発表された『オステンドのマルタン（デュ・ノール）夫人への手紙（A Mme Martin (du Nord) à Ostende)』（以下『M夫人への手紙』と略）が実はネルヴァルの手になるものであると確認され，プレイヤッド版第3版に初めて発表されたのは1970年のことであった。プレイヤッド版の編者リシェが前書きで明言している通り[1]，これは紛れもなくネルヴァルによって書かれたものであり，それはこの『M夫人への手紙』と『ローレライ』の第6章とを比較すれば容易に納得がゆく。わずかに文章が手直しされてはいるものの，『手紙』にあるパラグラフがほとんどそのまま『ローレライ』に引用されているからである。そしてこの『手紙』のなかで，ネルヴァルはゲーテの『ノヴェレ』の要約を試みているのである。

『ノヴェレ』は1826年から27年にかけて制作された[2]。この頃ゲーテは『ウィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の改作に着手し，『ファウスト第二部』の仕事も継続していた。前章で扱った『親和力』はゲーテ晩年の最初に位置する作品のひとつであったが，『ノヴェレ』の方はゲーテ最晩年の散文作品と言える。この短編小説の際立った特徴は，作者が描く対象に常に一定の距離を保ち，客観的叙述を積み重ねてゆく手法にある。『ノヴェレ』では，登場人物の間の恋愛感情を中心に激しい感情の交錯が見られるにもかかわらず，調和と秩

序に満たされた静謐な調子が作品全体を支配しているのである。ここには，過度の感情から一歩身を引いた晩年のゲーテの姿を認めることができる。このような感情的要素からの距離化を得るために，ゲーテは『親和力』の場合と同じように象徴的表現を駆使して間接的に登場人物の心理状態を暗示したり，感情的やりとりを表現したりしている。そのため風景や動物などが象徴的意味を担うイメージとして，重要な役割を演じている。しかし少年がライオンを導き出す最後の場面に至ると，それまでのような客観的な調子が背後に退き，主観的・詩的要素に取って代わられる。そしてそこに生まれる対比がこの場面を極めて詩的で印象的なものにしている。

＊　＊　＊　＊　＊

ところで，この『M夫人への手紙』を書いたときネルヴァルはどのような状況にあったのだろうか。彼の文学的名声はなによりも1828年の『ファウスト』の翻訳を出発点としており，それ以後ドイツ文学の翻訳者・紹介者として知られていた。文学への野心は強くあったものの，生活のためのジャーナリストとしての仕事と，当時流行していたホフマンなどのドイツの作家の翻訳がネルヴァルの主たる文学活動であった。演劇の分野では『ピキロ』『錬金術師』『レオ・ビュルカール』(38年版) などを発表してはいたが，ともに協作であり彼自身の文学的境地を開くものではなかった。要するにあちらこちらの雑誌に雑文を書いて資を得るという生活に追われていた。このような折，文学的キャリアに決定的な一歩を築くこと，そしてドイツ語をさらに訓練するということもあって，官費で外国へ行くことを考えるのである。ネルヴァルはギゾーの秘書ランゲと接触があり，彼の尽力が効を奏し1839年ウィーン行きが実現する。名目は政府派遣の出版事情調査というものであった。39年から40年にかけてのこのウィーン旅行が，ネルヴァルに決定的な影響を与えたことは疑い得ない。リシェなどはこの40年あたりをネルヴァル独自の文学世界へのターニング・ポイントと見ている。

《A partir d'une certaine date, qui se situe, croyons-nous, aux alentours de 1840, Nerval est en possession de son instrument, il joue à son gré sur le clavier de ses images et de ses mythes personnels.》[3]

『M夫人への手紙』はこの時期に書かれたものであると推測され，後述するようにいくつかの点でウィーン旅行中の経験と密接に結び付いている。それではこの旅行はネルヴァルにとってどのような意味があったのか。まずここでは，『M夫人への手紙』の分析にとって重要な要素となる2つの側面 ― 政治的側面と文学的側面―から概観しておきたい。

政治的側面というのは，この『M夫人への手紙』の宛名主であろうと思われるマルタン・デュ・ノール夫人の夫が時の政府高官であった事実に関わる。マルタン・デュ・ノールは優れた弁護士で，1830年以後ドゥエの議員，破棄裁判所付次席検事，パリ裁判所検事総長などを歴任し，1840年には法務大臣にまでなった人物であるという。ネルヴァルはある時期この大臣夫妻と交流があったと推測されているが，彼らとの関係をさらに裏付ける資料はいまのところこの『M夫人への手紙』以外にはないようである[4]。

ところで，この政府高官とネルヴァルの関係はネルヴァルの政治的日和見主義者としての一面を浮き彫りにしている。1830年ネルヴァルは『19世紀メルキュール・ド・フランス』誌に『人民―1830年』というオードを発表している。題名が示すとおり「7月革命」の政変時の人民の美徳や力を称えた作品であった。

《Nous avons vu le peuple et la cour face à face,
Elle, ameutant en vain ses rouges bataillons,
Lui, sous leur jeu cruel marchant aux Tuileries ;
Elle, tremblante et vile avec ses broderies,
Lui, sublime avec ses haillons !》[5]

周知のごとく，7月王政はすぐさま馬脚を露し，巨額の資産をもつ大ブルジョワだけが政治の主導権を握る。この頃フランスは産業革命に突入したが，労働

者の賃金はその上昇を阻まれ，生活状態は悪化する一方であった。そのために労働争議が激発し，とくに39年から43年にかけてはフランス全土でストライキが頻発した。しかも36年頃から頭をもたげてきた経済不況は39年から40年にかけて激化し，フランスの国内情勢は波乱を含むものであった。一方このような社会状況を背景に，社会主義思想が次第に人々の間に普及していった。プルードンが『財産とは何か』で「財産は窃盗なり」という有名なスローガンを掲げたのが1840年，まさにネルヴァルが時の政府の肩入れでウィーンで過ごしたあとパリに戻って来た年のことである。またウィーン旅行以前にも，ネルヴァルはルイ＝フィリップやギゾーの御抱えの新聞であった『カルーゼル』，『1830年憲章』などに投稿するという抜け目なさも持ち合わせていた。40年のパリ到着後，父方の親戚に書き送った手紙の中で，この旅行を政府からの mission であるとことさら強調しているが[6]，これは文学的な成功もさることながら，いかに自分が社会的・政治的に有用かつ重要な人間であるかを認めさせたいという，いわばコンプレックスの裏返しの表現であることは一目瞭然である。息子の文学への志にはまったく無理解な父親に対する，ネルヴァルからの間接的な自己主張であったと言える。「7月革命」の折には人民を称え，「ブザンゴ」と呼ばれる共和主義的思想に共鳴するグループに名を列ねていたネルヴァルだが，このような政治面での日和見主義的姿勢は彼の複雑な一面を垣間見させてくれる。後述するように，『ノヴェレ』へのネルヴァルの関心も決してこの政治的側面と無縁ではなかったと思われる。

一方文学的側面から見ると，3カ月半に及ぶウィーン滞在は少なからぬ収穫をもたらした。『ウィーンの恋』，『パンドラ』さらには『オーレリア』などにも，この旅行の際のエピソードが現れてくる。滞在中ネルヴァルはフランス大使で『ファウスト』の翻訳者でもあるサント＝オーレールと知り合い，また友人であったリストとも再会している。ことにピアニスト，マリー・プレイエルとの出会いはネルヴァルに決定的な印象を残した。『オーレリア』冒頭部分に，ネルヴァルはその時の印象をこう書き記している。

《Un jour, arriva dans la ville une femme d'une grande renommée qui me prit en amitié et qui, habituée à plaire et à éblouir, m'entraîna sans peine dans le cercle de ses admirateurs. Après une soirée où elle avait été à la fois naturelle et pleine d'un charme dont tous éprouvaient l'atteinte, je me sentis épris d'elle à ce point que je ne voulus pas tarder un instant à lui écrire. J'étais si heureux de sentir mon cœur capable d'un amour nouveau! ...》[7]

『パンドラ』のなかでは，プレイエルへの一時の情熱は，女優エステル・ド・ボンガールへの面影とともに,「手管に長けたパンドラ」(artificieuse Pandora)の中に溶け込んでいる。いずれにせよ，後で検討するようにウィーンでのこの一時の恋の影響は『M夫人への手紙』の『ノヴェレ』の要約を通じて見え隠れしているのである。

さらにまた，ちょうどこの頃ネルヴァルはゲーテの『ファウスト第二部』の翻訳を手掛けていたところであった。1840年6月23日，ネルヴァルは前述したランゲに宛てて次のように書き送っている。

《Imaginez-vous que j'ai durant cet espace de temps traduit et analysé le *Second Faust* de Gœthe qui présente des difficultés inouïes, plusieurs autres morceaux et fait trois introductions ou préfaces où je travaille encore, le tout sans préjudice de mes feuilletons réguliers.》[8]

28年の『ファウスト第一部』の翻訳とは異なり，この『第二部』ではネルヴァルは詩人としての成熟度を示している。本論考の第1章でも指摘したが，『第一部』の序文では単にスタール夫人のファウスト論を紹介するというだけであった。しかしこの『第二部』の序文では，ゲーテの哲学的思想はオキュルティスムの教義と結び付けられ，ネルヴァル独自の輪廻や不死への夢想が語られている[9]。ネルヴァルが『ファウスト第二部』の特に「ヘレナの挿話」の部分を翻訳の対象に選んだのも，それは彼の精神が浸っていた神秘主義的夢想に最も感応する部分であったからである。確かに『ファウスト第二部』に比較すると，『ノヴェレ』はネルヴァルの神秘主義的夢想を掻き立てる要素は多くない。しかし『ノヴェレ』の最後の場面は「ヘレナの挿話」のアルカディアの古典的

美と詩の場面を思い起こさせる。『ノヴェレ』に見られる激しい情念が昇華された後の調和的世界の現出は，『ファウスト第二部』とともに，ネルヴァルに晩年のゲーテの到達した思想的高みを知らしめるうえで無視できない役割を果たしたに違いない。

＊　＊　＊　＊　＊

文学作品の要約を試みることは，その作品の力点をどこに置くかが大きなポイントになってくる。要約する人間が枝葉の部分であると判断した部分は切り捨てられるか，極端に簡略化した表現で済ますことができるが，関心のある部分は当然浮き彫りにされる。翻訳と比べると，要約の場合はオリジナルがどのような切り口で見られたのかを知る手掛かりとなる。ネルヴァルが『M夫人への手紙』の中で紹介した『ノヴェレ』の要約からも，このような視点から様々な情報を手に入れることができる。次にネルヴァルの要約を紹介しながら，興味深いと思われるいくつかの点を取り上げ，考察を加えてゆくことにする。

『ノヴェレ』の前半は大公妃（princesse），大公の叔父フリードリヒ侯爵（oncle），従者ホノーリオ（Honorio）が中心となって展開する。ゲーテの原文では冒頭部分に，これから向かおうとする城や自然の様子などが細かに説明されてある。そうすることによってゲーテは城に象徴的意味を与えているのだが，ネルヴァルはここを極めて簡単に提示するに止めている。話の展開を優先して，この３人の行動を中心に要約を進めてゆこうというわけである。

城までの道程で最も興味あるエピソードは火事の場面であろう。

> 《(...), puis tout à coup le vieillard (=oncle) se récrie, donne la lunette à sa nièce : la ville est en feu. Ici Gœthe a placé une magnifique description de cet incendie en plein jour, de la fête désolée, du peuple qui fuit, de cette terrible catastrophe que la lunette seule peut leur faire apercevoir.》[10]

この火事の場面が，ネルヴァルの作品のなかの最も重要なテーマである「火」のテーマに結び付くことは言うまでもないことであろう。ゲーテの『ファウス

ト』の翻訳以来，ネルヴァルは「火」が象徴する気質をもった人物に一貫した興味を抱いてきた。カインやアドニラムなどの人物は作者自らがこれらの人物との血統のつながりを認めている。またネルヴァルの作品には「太陽」「天体」「火山」「地中の火」など「火」のイメージを喚起する一連の表現が随所に見られる。そして「火事」もまた，これらのリストに加えることができる。たとえば，「カリフ・ハケムの物語」のなかには印象的な火事の場面が見られる。

> 《En peu d'instants, la flamme avait dévoré les bazars au toit de cèdre et les palais aux terrasses sculptées, aux colonnettes frêles ; les plus riches habitations du Caire livraient au peuple leurs intérieurs dévastés.》[11]

さらに『火の娘たち』の序文では，作者の分身ともいえるブリザシエが独白のなかで劇場に火を放ち，炎の中を愛する女優を連れ去りたいという思いを語るところもある[12]。

火事に続く場面でネルヴァルが要約したのは『ノヴェレ』前半の山場となっている部分である。火事で逃げ出して来たトラが公妃に襲いかかろうとする場面である。

> 《Tout à coup son cheval recule : c'est un tigre énorme qui sort des broussailles ! La princesse jette des cris d'effroi. Heureusement, Honorio l'écuyer les entend : il s'élance à bas de son cheval et tire un coup de pistolet qui atteint le tigre à la tête. L'animal se roule à terre en hurlant, et bientôt le jeune écuyer, tout fier de son exploit, achève le tigre mourant avec son couteau de chasse, et s'occupe à lui couper la tête afin d'offrir à sa maîtresse le trophée de sa victoire.》[13]

確かにこの場面は，表向き公妃が勇敢な従者のおかげで危うく命を救われる，いわば美女救済の武勇伝のような体裁を保っている。ネルヴァルの要約もその点に主眼が置かれている。しかし，作者ゲーテの狙いはそのようなサスペンスを読者に与えるところにはない。ネルヴァルの要約では無視されているが，この場面の直後にホノーリオが自分の心に秘めた公妃への情熱を初めてほのめかす場面がある。二人の人物が交わす心理的やり取り，緊張感はここで最高潮に

達する。しかしゲーテは登場人物の心に立ち入って解説することなく，これらの人物の間の言葉のやり取りや態度を客観的に描写するだけなのである。それゆえ人物の感情が一層際立って読者に印象づけられるという効果があり，ゲーテの狙いもそこにあると言える。ところがネルヴァルの要約では，この部分の話の展開を単純化して読者にすっきりとした形で浮き彫りにしている。おそらくここでの話が複雑化するのを嫌ってこの部分の感情的な側面を故意に無視したのであろう。しかし後述するが，ネルヴァルはここでウィーン滞在中経験したマリー・プレイエルへの情熱の思い出を重ね合わせて見ている，とも考えることができるのである。

次に，ホノーリオに殺されたトラのところに飼い主である旅回りの貧しい動物使いの一家が登場してくる。この旅回りの動物使いはネルヴァルのロマンティックな夢想を刺激するのにじゅうぶんであったに違いない。自らが創刊した『演劇界』の序文に，ネルヴァルはウィルヘルム・マイスターのように旅回りの役者たちとの生活や女優たちとの恋への憧れを語っているが(14)，それは晩年に至ってもまだ彼の心を占めている夢のひとつであった。

> ≪En regardant les deux jeunes filles, l'une vive et brune, l'autre blonde et rieuse, je me mis à penser à Mignon et Philine dans *Wilhelm Meister*, et voilà un rêve germanique qui me revient entre la perspective des bois et l'antique profil de Senlis.≫(15)

言うまでもなく『ウィルヘルム・マイスターの修業時代』に登場してくる人物のなかで，ミニョンほどロマン派の人々の心を強く捉えた女性主人公はいない。ミニョンの放浪生活，性格の野性的な一面，そして自然な感情から迸る歌心などは，この『ノヴェレ』に登場してくる旅回りの動物使いの一家とも共通する要素である。要するに，旅回りの動物使いの一家はミニョンのテーマの延長線上にあるものなのだ。この要約が発表された1840年，『ファウスト第二部』の翻訳が終わるやネルヴァルはミニョンの歌を翻訳しているが，それも単なる

偶然ではないであろう。『ノヴェレ』の旅回りの家族はミニョンとともに，ネルヴァルにとってロマンティックな放浪生活への夢想と結び付いているのである。

殺されたトラの回りで動物使いの一家が嘆き悲しんでいると，火事の騒ぎに紛れてライオンも逃げ出して近くに潜んでいるという知らせが飛び込んでくる。そして動物使いの家族の子供がライオンを手なずけて檻に戻そうとするのが最後の場面である。この部分をネルヴァルは次のように要約している。

《Il (=enfant) tire de sa poche une flûte et se met à jouer un air religieux, pendant que le père et la mère, agenouillés, chantent les paroles d'un hymne qui célèbre l'histoire biblique de Daniel dans la fosse aux lions.

L'enfant monte toujours, et les sons de l'instrument s'affaiblissent peu à peu; mais, à mesure, la voix de la pauvre famille chrétienne s'élève en célébrant la puissance de Dieu qui donne la force à l'homme et à l'enfant et qui leur assure la victoire sur les animaux rebelles. Rien n'est beau comme les paroles de cet hymne, qui ne se termine que lorsque l'enfant s'est rendu maître du lion, arrêté par les sons de la flûte.》[46]

この場面は素朴な厳粛さと自然な宗教的感情が溢れている。少年が聖者ダニエルを称えて歌う歌には技巧や気取りのない情感が込められ，詩と音楽が一体となっている。民衆の間で歌い継がれてきた詩や音楽に強く引かれたネルヴァルが，この部分から深い感銘を受けたとしても不思議ではない。

また，音楽と歌によって野獣が柔順になるというのは，オルフェウス神話とも結び付く。ロマン派の作家たちは，この神話に自然や世界に対する詩精神の崇高な力の優位を見ようとした。ノヴァーリスの『オフターディンゲン』などがその好例であろう。ネルヴァルもまた，このようなロマン派共通の美学的観点からこの場面に魅力を感じていたのであろう。ところで，ネルヴァルにとってこの神話は将来別の意味で極めて重大な神話となり，晩年の作品の随所に顔を見せることになる。オルフェウス神話は，彼の内でエウリュディケーを求め

ての「地獄下り」に力点が置かれるようになるからである。そして狂気の発作の体験がこの神話に重ねられる。

《Et j'ai deux fois vainqueur traversé l'Achéron :
Modulant tour à tour sur la lyre d'Orphée
Les soupirs de la Sainte et les cris de la Fée.》[17]

『ノヴェレ』の要約を試みた1840年が，ジェニー・コロンの結婚（38年）と最初の狂気の発作（41年）とに挟まれた時期に位置していることを考え合わせると，ネルヴァルにはオルフェウスの神話が自分の運命に深く関わる神話となるかも知れないという予感があったのであろう。

さらに，『ノヴェレ』の最終場面はモーツァルトのオペラ『魔笛』をも想起させる。ゲーテがこのオペラに深く感銘を受け，その続編を創作しようと意図したのは有名な話だが，ネルヴァルもまた1853年頃イポリット・リュカと共同で『魔笛』に似た脚本を創作しようとしていた[18]。ジャック・シャイエが精緻に分析したように『魔笛』はフリー・メーソンの秘儀と象徴を取り入れたオペラとして名高い。ネルヴァルがこのオペラのエゾテリックな面に魅せられたのは確かであろうが，ここではこのオペラ全体のメルヘン的な雰囲気を指摘しておきたい。タミーノは魔笛を吹くとその魔力によって野生の動物たちをおとなしくさせてしまうことができるが，これは『ノヴェレ』の少年の笛の魔力を思わせる。

＊　＊　＊　＊　＊

以上『ノヴェレ』の要約の中で興味ある部分をいくつか取り出して検討してきた。しかしここで疑問として残るのは，ネルヴァルがこの作品の要約を思い付いたのは全く純粋に文学的な興味だけに駆られてのことだったかということである。確かにこのゲーテの『ノヴェレ』が小品ながら魅力に溢れた作品であることは言をまたない。しかしネルヴァルのある文学作品への興味は，ほとんどの場合自己の固定観念や夢想といったものの支えとなるような作品，あるいはまたインスピレーションの媒介となるような作品に向けられているのが常で

ある。文学的価値から見てたとえ二流・三流の作品であっても，極めて個人的な理由からネルヴァルの心を強く捉えることも少なくない。したがってこの個人的理由についても考えを巡らせてみる必要がある。

まず考えられることは，ウィーン滞在のときの思い出である。重ねて指摘したように，この時マリー・プレイエルに対する一時の恋を経験している。ネルヴァルはこの恋の思い出を，『ノヴェレ』のホノーリオが公妃に抱いていた恋に重ね合わせて見ていたのではなかったのだろうか。『ノヴェレ』ではホノーリオの恋の情熱は，トラやライオンなどに象徴される自然力と同じ次元の抑制し難い力として表現されている。しかしそのような力も，最後の場面で暗示されるように，少年の歌と笛とが象徴する芸術の力によって調和的に解決される。このように考えると，ネルヴァルはこの短編小説のなかにプレイエルへの情熱を芸術的昇華によって克服する自分自身の姿を見出したと言うことができる。

次に考えられることは，前述したネルヴァルの政治的日和見主義の側面との関連である。ホノーリオは一介の従者であり権力を握る人間の前では，その情熱がいかに真摯なものであるといえども，それに流されることなく抑えておくのが知恵というものである。なぜなら，最後の場面で示されているように，いずれは超越的な力によってすべてが調和的に解決されるからである。これはゲーテの説く積極的な意味での「あきらめ」に結び付く。前述したように，『M夫人への手紙』を書いているとき，ネルヴァルは心ならずも時の政府に迎合している自分を自覚していたはずである。そのようなとき『ノヴェレ』を通して，一時権力の側に付こうともいずれはある解決に導かれる，との教訓を得たと見ることもできる。こう考えてくると，次に引用するネルヴァルの言葉がこの『ノヴェレ』の最後の場面を暗示しているのではないかとも思われてくる。

《Il y en a qui tuent les lions, je les admire ; mais j'aime mieux ceux qui les domptent. — Les lions s'en vont, comme les rois et les forêts.》[19]

ノートに断片的に書き記されたこの言葉は，前後の文脈から判断するわけにはゆかないので様々な解釈が可能であろう。しかし，今述べたように，もし『ノ

ヴェレ』とこの言葉がネルヴァルの政治的姿勢という点で呼応し合っているとすれば，こう解釈できる。逆らうことのできないほどの力（権力）を手なずけることができれば素晴らしいことだ，しかし，力あるものはいずれ衰退してゆき，ある調和が訪れるものなのだ，と。つまり，迎合的な態度に対する自己自身への罪悪感から逃れるために，ぜひ必要な言い訳だったと思われるのである。

注

(1) Nerval : *Œuvres* II (Pléiade, 4e éd.), 《Préface》, pp. XII-XIII., および pp. 1508-1509. の p. 905. の注2参照。また Jean Richer : *Nerval, expérience et création* (2e éd.), Paris, Hachette, 1970, p. 667. 参照。

(2) エッカーマンの『ゲーテとの対話』の1827年1月18日，および同年1月25日の対話などを参照。

(3) J. Richer : *op. cit.*, p. 282.

(4) Nerval : *Œuvres* II, p. 1509. 参照。

(5) Gérard de Nerval : *Poésies et Souvenirs* ; édition établie par Jean Richer, Col. 《Poésie》, Paris, Gallimard, 1974, p. 71.

(6) Nerval : *Œuvres* I (Pléiade, 5e éd.), p. 876. の1840年8月17日付のアレクサンドル・ラブリュニー宛への手紙や同年8月18日付のジャン・ラブリュニー宛の手紙参照。

(7) *ibid.*, p. 360.

(8) *ibid.*, p. 872.

(9) *Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval* : I, texte établi par Jean Richer, Paris, Minard, 1959, 収録の《Préface de *Faust*, suivi du *Second Faust*》参照。

(10) Nerval : *Œuvres* II., p. 910.

(11) *ibid.*, p. 385.

(12) Nerval : *Œuvres* I., p. 155-156. 参照。

(13) Nerval : *Œuvres* II., p. 910.

(14) *Œuvres complémentaires de Nerval* : I. に収録の《Mémoires curieux relatifs à l'art dramatique : Introduction》参照。

(15) Nerval : *Œuvres* I., p. 145.

(16) Nerval : *Œuvres* II., p. 911.

(17) Nerval : *Œuvres* I., p. 3.

(18) *Ibid.*, pp. 1074-1075. の H. リュカ宛の手紙参照。
(19) *Ibid.*, p. 432.

《結　語》

ネルヴァルは「ファウストのテーマ」に強く影響され，その影響が主要な作品に見られるのは周知のごとくである。この『ファウスト』のインパクトの大きさに比べれば，確かに散文作品の直接的な影響を特定化することは困難である。しかしこれまで検討したきたことを踏まえて言えば，まず第1に散文作品との出会いによってネルヴァルはゲーテの思想的広がりを幅広く捉えることができたということであろう。特に『ファウスト第二部』の翻訳と『ノヴェレ』の要約がほぼ同時期に位置していることは，『ファウスト』だけでは把握しきれないゲーテの晩年期の思想を『ノヴェレ』を参照することによってさらに深く豊かに理解する一助となったことを示唆している。そして第2に，自分の中にある固定観念や夢想をさらに強化し，発展させる結果をもたらしたことである。ゲーテの散文作品には，『親和力』で見られたようなオキュルティスム的要素や，『ノヴェレ』にあったような「火」やオルフェウス神話などのつながりなど，ネルヴァルの本来もっている傾向を活性化させ深めてゆくような要素がある。無論これらは『ファウスト』にも見られるが，散文作品に接することによってネルヴァルの内なる傾向にさらに拍車がかけられたと考えることができる。ネルヴァルの文学的世界の中で『ファウスト』と散文作品群が占める位置は，結局次のような比喩を用いて表現できるであろう。『ファウスト』がネルヴァルの文学的宇宙で決定的な影響力を及ぼしている巨大な惑星であるとするなら，その引力圏内にあるが，同時に惑星にも何らかの影響を及ぼしている衛星がこれら散文の作品群なのである。

そして第3に，ネルヴァルは『親和力』や『ノヴェレ』などの作品を盾に，その虚構のヴェールに覆って自己の運命や遭遇した出来事を語っているという

ことである。読み手には，ネルヴァルによって生きられた真実の生がゲーテの作品の背後に見え隠れするのだが，はっきりと核心をつかむことができない。こうして，ネルヴァルは真実の生と虚構の生とを混合させることによって，読み手の目を攪乱するのである。狂気の発作以後この傾向はさらに強まり，ネルヴァルは自分の作品を通じて自己の「神話化」をさらに推し進めてゆくことになる。 (完)

《テキスト》

Nerval : *Œuvres* I (5e éd.), Bib. "Pléiade", texte établi par Albert Béguin et Jean Richer, Paris, Gallimard, 1974.

Nerval : *Œuvres* II (4e éd.), Bib. "Pléiade", texte établi par Albert Béguin et Jean Richer, Paris, Gallimard, 1978.

Œuvres complémentaires de Gérard de Nerval, tome I, textes réunis et présentés par Jean Richer, Paris, J. Minard, Lettres Modernes, 1959.

Gérard de Nerval : *Pandora/Les amours de Vienne*, édition critique nouvelle de Jean Senelier, Paris, Klincksieck, 1975.

注）プレイヤッド版については，現在（1989年12月）ジャン・ギヨームとクロード・ピショワらを中心に新版の『ネルヴァル全集』として第1巻および第2巻が刊行されている。予定では第3巻目をもって全集が完結することになっているようだが，新版の評価はその全貌が明らかになってのちに議論されるべきであろう。したがって，その点を考慮して本論考作成にあたってはベガンとリシェ校訂による旧版『ネルヴァル作品集』に拠ったことをお断りしておく。

Gœthe : *Ottilie, ou le Pouvoir de la Sympathie* (*Die Wahlverwandtschaften*), traduit par M. Breton, 2 vol., Paris, Veuve Le Petit, 1810.

Mémoires de Gœthe (*Dichtung und Wahrheit*), traduit par Aubert de Vitry, 2 vol., Paris, Ponthieu, 1823.

Gœthe : "Une nouvelle de Gœthe" (*Novelle*), *Nouvelle revue germanique*, septembre–décembre 1831., pp. 213–231.

《主要参考文献》

◆ネルヴァル関係

Cartier, Julia : *Un intermédiaire entre la France et l'Allemagne, Gérard de Nerval*, Genève, Société générale d'imprimerie, 1904.

Cellier, Léon : *Où en sont les recherches sur Gérard de Nerval?*, Paris, Minard, Lettres Modernes, 1957.

Constans, François : *Gérard de Nerval devant le destin*, Paris, Nizet, 1979.

Dédéyan, Charles : *Gérard de Nerval et l'Allemagne*, Paris, S. E. D. E. S., tome I 1957, tome II 1958.

Dubruck, Alfred : *Gérard de Nerval and the German heritage*, the Hague, Mouton & Co., 1965.

Richer, Jean : *Gérard de Nerval et les doctrines ésotériques*, Paris, Le Griffon d'or, 1947.

: *Gérard de Nerval* (7e éd.), Paris, Seghers, 1972.

: *Nerval, expérience et création* (2e éd.), Paris, Hachette, 1970.

◆ゲーテ関係

Baldensperger, Fernand : *Gœthe en France* (2e éd.), Paris, Hachette, 1920.

Casalis-Thurneysen, Monica : *Le problème de la sociabilité dans les romans de vieillesse de Gœthe*, Bern, Peter Lang, 1984.

Lepinte, Christian : *Gœthe et l'occultisme*, Paris, Les Belles Lettres, 1957.

Marache, Maurice : *Le symbole dans la pensée et l'œuvre de Gœthe*, Paris, Nizet, 1960.

Thieberger, Richard : *Le genre de la nouvelle dans la littérature allemande*, Paris, Les Belles Lettres, 1968.

《訂正》

《序》：39ページ5行目

「バルデンスペルジェ」を「バルダンスペルジェ」に訂正。

《I》章：43ページ20行目

『サマラ』を『スマラ』に訂正。

：45ページ7～8行目

「リシェも推測するように，ネルヴァルは恐らくこの雑誌の訳を参考にしたと思われる(9)。」を「ネルヴァルが翻訳を参考にしたとするなら，おそらくこの雑誌であったであろう(9)。」に訂正。

（文学部非常勤講師）